町民文芸

只見短歌会　令和五年十二月詠草

夫逝きて過ぎこし月日の長かりし面影もいつかうすれ行くなり　馬場　八智

婆ちゃん何才うさぎ年七度え一初めてだお口あんぐりお目々まん丸　目黒　富子

晩秋の陽に輝やきし銀杏（いちょう）の木ぎんなん拾ひ合ふは思ひ出　関谷登美子

ぐるぐると無重力のやふ息子（こ）の寝相夢に見つつか宇宙飛行士　立花　奏音

その時は気付かず母に接すれど今亡く折に触れて思ふも　新国由紀子

伝承の郷土料理に挑戦の中学生は手際の良きし　渡部ヨリ子

こぶし苑ショートステイの我に来てスタッフ等みな明るくやさし　故　新国　洋子（遺　作）

只見俳句会　十二月定例会

日高俊平太　指導

小雪や畑へ戻す野菜屑　礼

尻もちのなかなか立てぬ牛蒡堀り　真理子

霜焼や第一号は足の指　一穂

七五三終えて長髪バッサリと　紺青

夕餉どき間引き人参かじりおり　修一

信号の向こうの山や秋夕焼　信

山里の色変えぬ松凛として　都

切れそうで切れぬ電話秋の雨　味代子

外套の身の丈あわず八十路入る

出棺や黒衣の雪の白きこと